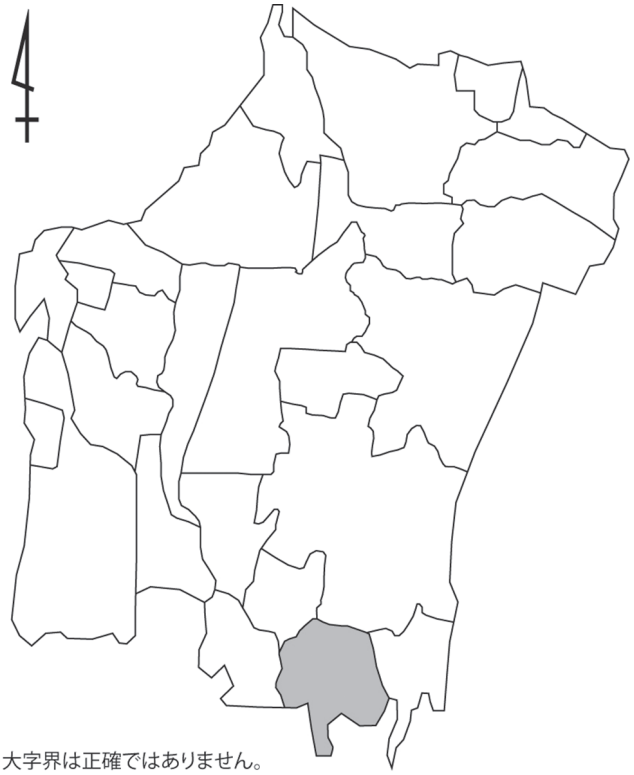
郷土かみのかわの歴史・文化財

上三川の地域と歴史　坂上

坂上は、町の南端に位置し、下野市とその境を接しています。地形は、鬼怒川右岸の低地と台地からなり、地区の東側を江川が南流しています。慶安郷帳には坂上村、元禄郷帳・天保郷帳には坂之上村の村名が記載されています。天保年間（1830～1844）の家数は、18戸です。日光社参に際しては、小金井宿の助郷役が課せられました。江戸時代の初めは烏山藩領で、その後は幕府領・旗本領となりました。字大門口に鎮座する星宮神社は、建長元（1249）年に上三川城初代城主である横田頼業が上三川城を築城した時に創建したといわれています。



※大字界は正確ではありません。

「坂上」という地名の由来は、平安時代に編纂された『和名類聚抄』にみることができます。当時の上三川町一帯は、「下野国河内郡」に属していました。さらに、河内郡内には11の郷と呼ばれる行政区画がありました。そのひとつが「酒部郷」です。「坂上」は、この「酒部」が転訛した地名ではないかとする説が最も有力です。また、同時代の上神主・茂原官衙遺跡から出土した瓦には、「酒部」の氏を冠した人々の名が多く確認されています。

このほかの地名の由来の一説には、鬼怒川と田川に挟まれた台地の上（坂の上）にあることが語源となったという説もあります。そのような立地であったため、古墳時代には40基以上もの古墳が造られました。そのなかでも字北原にある長塚古墳は、全長42ｍもある前方後円墳で、この地区で最大規模のものです。この地において古墳が盛んに造られた背景には、川から近い台地上であったことも大きな要因のひとつといえるでしょう。

さて、坂上の東側には小松渕と呼ばれる地があります。今を遡ること数百年前、小さな沢に朽ちた老松が一本立っていました。その近くに、とある少女が父と祖母と3人で慎ましやかに暮らしていました。やがて祖母は老衰で亡くなり、少女は毎日欠かさず祖母の供養を行いました。その後、父は再婚しましたが、少女は継母のいじめに苦しめられ亡くなってしまいました。継母は、何の供養もしないまま少女の亡骸を老松の下に埋めてしまいました。以来、老松の下には少女の霊が現れ、道行く人に祖母の供養を頼んでいたそうです。これを怖れた村人達は老松を避けるようになりましたが、いつしかこの憐れな少女に同情し、少女と祖母の供養をしてあげました。以降、少女の霊が現れることはなくなったそうです。いまでは老松がどこにあったのか定かではありませんが、少女の悲話は伝説「小松渕の悲話」として語り継がれています。

瓦に刻まれた氏名「酒マ少諸」
※「マ」は「部」の省略文字です。